



交流を 問い直す

生活文化の基盤であった都市に
埋め込まれた価値を取り戻し、
再起動へつなげる

連続特集企画「ルネッセ (Renesse)」。

第2弾では、前号に引き続き、
スーパードバイザーの松岡正剛氏とともに、
都市における交流のあり方をテーマに語り合う。

増田智泰撮影

対談

〔榊編集工学研究所所長〕

松岡正剛

Matsuoka Seigow

池永寛明

Ikenaga Hiroaki

〔大阪ガス榊エネルギー文化研究所所長〕

日本文化にある インタークロス性

池永 前号から取り組んでいる「ルネッセ」(再
起動「Renesse」)ですが、前号の「場」に続き今
号では「交」、交流を問い直していきたいと思
います。

どうも「大阪人」というと、あるイメージを抱
かれて、個人という主体が見えづらく、交流する
主体や対象が何であるのかが見えなくなっている
ように感じています。しかしこの主体や対象が見
えないという問題は、大阪に限らず、近畿圏、日
本が抱えているように思います。そこでまず、交
わる主体と対象の個性、オリジナリティが何であ
るかを明らかにすべきではないか。さらに、「交」
を考えるには、外からの活力が集まって交わるこ
とができる、環境や風土についての考察も欠かせ
ないのではないか。この視点の重要性は、インバ
ウンドの文脈で語られることはありますが、海外
の人を対象とするのみならず国内の人々に対して
もなければならぬ。松岡先生には、多様な意味
を持つ「交わり」という文字の読み解きなども含
めてお話をいただければと思います。

松岡 日本における「交」は、たとえば蝦夷、陸
奥、大和、博多といったように地域によって「交」

の視点がズレることもありますし、歴史的なこと
でいえば、仏教や儒教のように外からやってきた
文物が交わるということがありました。

ですが、今一番考えるべき「交」は、交際、交
易、交流、交通、それから交換です。要するに
「インタークロス」です。英語には、トランスク
ロスやトランスミッション、トランスファーとい
うように、境界を越えるという意味の「トラン
ス」という語がありますが、日本は万葉の頃から
インタークロッシング型に文化や言語、モノを交
えるということが多かった。それが「交わり」と
いうことです。これをどう捉えるべきかが、いま
だ議論されていません。インターとトランスの違
いを考えたほうがいいと思います。

なぜインタークロスが重要になったかという
内と外の間、私は「リミナル」と呼んでいます
内と外の間にもうひとつあったのです。中国のよ
うに家の四囲を囲んでしまう文化ではなく、開け
放しでありながら内と外の間を軒や庇、縁側、生
垣などをつくるということですね。そうすると内
と外が呼応する間、際に何かができています。これ
がインターではないか。茶室でいうと内露地、外
露地、さらに古田織部や小堀遠州の頃の中露地と
いったものです。外に縦断的にコミュニケーション
するのももちろん大事だけれども、小さなこと

ろでもコミュニケーションして交を起こす。この多重
性が日本の「交」にとっては大きい気はしますね。
池永 それは大阪ガスがやっている実験集合住宅
「NEXT21」の「中間領域」という考え方にも
つながっています。プライベート空間でありなが
ら公の空間でもある、内と外の間を「中間
領域」と名付けていますが、この中間領域が、こ
れからの住宅のみならず都市や社会構造において
重要ではないかと捉えています。かつてはそう
いった土間や縁側、庭や露地のような世界があっ
たわけですが、現代は空間として無くなるだけ
なく、使い方がわからなくなっている。

松岡 そうですね。公と私が変わるところには、
中間領域である「共」が出てきます。「共」を
「交」につなげる。点が交わることが必要な
のですが、それが単一化したり、短すぎたり、切
れ切れになっている。共のなかに交がたくさん出
てこなければいけないのに、共が生まれるところ
まできていない。中間領域が単調なんですね。

「和魂漢才」「和魂洋才」にみる 日本型翻訳技法

池永 インバウンドで注目が集まっている高野山
ですが、松岡さんは高野山の始祖空海について
『空海の夢』という本を書かれています。空海に



代表されるように、外のものや異なるものを取り入れ日本的なるものを生み出してきた日本的翻訳は、「交」の観点としてもポイントだと思いが、どのようにお考えでしょうか。

松岡 まず、日本は長年にわたる無文字社会だったというところが大きいと思います。文字がなかったたので、ボーカリゼーションとしての言葉、ボーカルランゲージが豊富になります。ボーカルなものの中には「書く」「読む」というリテラシーがなく、オーラルで伝え合うぶん、日本人は「交」も早かったのです。

漢字は外からきたものですが、徐々に日本のものとしていきました。稗田阿礼の語りを太安万侶が万葉仮名に置き換えて、訓読みや音読みにしていく。たとえば池永の「池」や松岡の「松」は音としてはあったけれども、文字としては、後にはじめていったわけですね。そこにトランスレーション、翻訳が出てきます。つまり「あてはめ」が起こる。これも「交」なんです。世界のグローバルな基準からヒントを得て、さらに日本的に組み合わせるということをやったという意味において、文字や言葉の翻訳はおもしろいと思います。

同様に仏教や儒教も翻訳しているわけですが、これはまた独特です。空海が梵字まで学習し、かつ日本的に翻訳した「両界曼荼羅」は、インドや中国にあったものから日本的なものに切り替わったものです。さらに浄土教では、源信の『往生要集』の浄土論というの日本的な翻訳が起っています。禅は鎌倉時代に入ってきましたが、道元の『正法眼蔵』を読むと、中国人には読めない日本の漢文で書かれています。そういうふう独特な「あてはめ」による交差文化をつくったという意

味で、日本的翻訳には画期的なメソッドが潜んでいるように思います。

池永 禅問答も重要だったのではないのでしょうか。外国のコンセプトを翻訳して問答しあい、「違うけど同じ、同じだけ違う」ことを日本的に翻訳していった。文字をたんに翻訳、トランスレートするだけでなく広がりを与えていったのではないかと思います。

松岡 禅問答のもたらす暗示世界と間接的な表現力、「こういうものやろ」と絵にして見せるというのが日本的な翻訳力だと思います。

池永 そのように立体的に組み立てる能力を、さらに「天下の台所」時代の大坂には感じます。

日本的翻訳という観点からいうと、幕末から明治にかけて、西洋の文学や学問を日本人は一気に成に翻訳していきます。たとえば「ソーシャル」を「社会」に変え、「エコノミー」を漢籍から経世済民の「経済」を取り出すといったように、もともとの漢籍の知識をプラットフォームに読み取り翻訳していく能力がすごいのではないかと思います。

松岡 そうですね。一言で言うと「和魂漢才」というメソッドです。藤原公任の『和漢朗詠集』は、中国の漢詩と日本の和歌を並べていますが、ある漢詩をひとつ選んだあとに和歌が数首続くこともあれば、和歌が続いたあとに漢詩が1篇でうけることもある。そういうふうに公任が編集し、藤原成が書に起こしたものが『和漢朗詠集』なのですが、外と内の間に露地があるように、その和と漢にある間が非常に巧かった。外からきた漢字、仏像をつくる技術、屋根をつくりあげる建築技術といったものを使うけれども、あくまでも和の魂でそれをやる。これが、江戸時代に蘭学が入ってきてからは、「和魂洋才」に切り替わった。和魂漢

才のメソッドにあった、間の創造力やリミナルな空間力、それを洋においても行ったわけです。中村正直や西周、福沢諭吉が、「スピーチ」を「演説」という言葉にし、「ソサエター」を「社会」という言葉にしたことを、中国が驚いて逆に取り入れ、東洋という言葉や資本という言葉が日本から学んだわけですね。こういったところは、日本のすごいところです。しかし最近のグローバルリズムには、和魂漢才の頃から続いてきたものがない。

ビジネスにみる つながりの重要性

池永 まさにその課題はビジネスにも関わってきます。天下の台所時代の大阪の商売、「トランスファービジネス」について伺います。

綿花を見て着物にしてファッションをつくる、蝦夷の海藻を見て昆布にしてそれを出汁にして上方料理にする、菜種を見て菜種油にして江戸時代の夜を明るくするというように、全体像をイメージしてビジネスフローを組み立てましたが、まさにさまざまな領域で構築されてきた日本的翻訳力が活かされた。西廻り・東廻り航路という水路ネットワーク、インフラをベースに全国から原材料を調達し畿内で加工し全国に流通した、多種多様な情報をトランスミッション的に変換し価値あるものを生み出し、マーケティングで全国にお届けする。この力を現実にしたのは、株仲間や講という同業者組合などの人的ネットワークと、木村兼葭堂などの多様な人材との交流による学びの場によって商人の力が磨かれたからだと思います。

松岡 おそらく秀吉が大坂に凱旋したことは、すごいことだったのでしょう。つまり下層庶民であった日吉丸から羽柴秀吉を経て太閤になり、大坂に

来てまちづくりをしたということ。町人の学習意欲や、石田梅岩の「心学」や山片蟠桃の『夢の代』などが加わって、懷徳堂だとかになっていったのも、根本は「誰だって天下一になれる」という秀吉の成功によるところが大きい気がします。

また、四天王寺以来のそれまでの大坂は仏都であり、ある意味では吹き溜まった貧困だとか病氣だとかがあった。一方で住吉さんみたいに海のネットワークを動かしていた人たちのまちでもあった。そこに秀吉が来たことによって、一から十まですべてを組み変えることが大坂のなかでできると思い始めた。そこに町人や学者、武家たちが手を組んで天下というものをつくるというモデルができた。池永さんの言うトランスファージングだと思えます。

トランスファージングするためには何かを溜めることをしないと駄目だとなったのかもしれない。塩昆布は塩分を溜めるためのものですし、京都の鰯蕎麦ではないけれども、蝦夷から来たものを燻製にしておく、あるいは漬物や佃煮にするとか、そういう溜める方法は大阪だという気がします。あの技術にはまさに上方らしきがある。

池永 大坂でうまくトランスミッションが機能したのは、先ほどの同業者組合、講的な要素が大きいのではないかと思えます。116号のお話にもありましたが、海保青陵の「利」に対する編集力、運命共同体が圧倒的な競争力を生み出した。江戸から明治へのビジネス環境が変化するなか、江戸時代につくりあげた「トランスファージング機能」を新たな事業環境にあわせ、強みであった運命共同体、同業同志で信用保証や連帯保証する仕組みをベースに、大坂で近代企業や様式を生み出した。松岡 それは大きい。江戸はもう少しリアルに決

けではなくて、網の目のような川筋文化というものを、上方や大阪が持ち出すべきだと思います。池永 北前船のイベントやフォーラムが増えてきましたが、過去のことを掘り起こすだけでなく、現代的視点でその本質とメカニズムを理解し、現代のビジネスに活かしていく必要がありますね。松岡 川や海に、恋や冒険や犯罪といった阿鼻叫喚のドラマがあるというふうになったほうが、文化になりやすい。わかりやすく言うと、ジョニー・デップ演じるジャック・スパロウ船長の『パイレーツ・オブ・カリビアン』やマンガ『ONE PIECE』のような、ああいうものを川筋、日本海、大阪の間に起こす。それには銭屋五兵衛や高田屋嘉兵衛といった人物をキャラクターとして立てていくといいでしょうね。

内と外の視点を活かし、新しい情報インターフェイスを

池永 最後に、まちにおけるつながりを考えたいと思います。国はコンパクト&ネットワークを指しています。人口が減少するなか、地域ごとに駅の周辺に必要な機能・施設を集約していいこととしていますが、世界で一番住みよいまちといわれるメルボルンでは、まず人をベースにして、20分間で必要な場所へたどりつけるまちづくりを進めています。日本はまだまだ開発主義というか、人が減っているなら施設・サービスを集約したらいいというような考えになりがちで、主体である人が見えていないように思います。

近畿はまさにコンパクトです。大阪から40キロほどで京都、神戸、奈良まで入ります。外国人旅行者は、たとえば大阪に滞在して京都、奈良、神戸から滋賀、和歌山をそれぞれのストーリーを描

済していると思います。金決済と銀決済の違いもあります。でも大坂は信用買いや担保、手形、あるいは「まったれ」の精神とか、信用的なものをつくっていますね。信用経済の基礎をつくったのは大坂だという説はまだされていない気はしますが、私の勘では絶対大坂だと思えます。

モノ、ヒト、コトを運ぶ川と海の文化を豊かにする

池永 116号でも少し川のお話が出ましたが、川と湊・港といったネットワークインフラが日本において重要で、モノ、ヒト、コト、情報を交えて流したことでまち・都市をつくりあげました。松岡 日本は長らく鉄砲水に悩まされてきた。今でも豪雨が降ると川が氾濫しますよね。その対策と堤防づくりをずっとやっているわけです。

いてエンジョイされている。ロングステイで滞在する人たちも増え、外国人のほうが多様な近畿の使い方というか、近畿の地域性をわかっています。さらに最近是在住外国人や留学生も増えてきているので、意図せずに大きく多種多様、多面的な社会に向かっているのかもしれない。

松岡 私の提案としては、ふたつあります。ひとつは、ヨーロッパでも東南アジアでも台湾でもフィリピンでも、アメリカ人でも中国人でもいいですが、そういう人たちに参加してもらい、彼らが見た大阪、関西、上方づくりをブランディングすること。かつて、ブルーノ・タウトやジョサイア・コンドルが日本のよさを広めてくれたように、彼らには日本を再発見する力があるからです。ただシナリオを自由にさせるのではなく、上方なりにそれを受け止めたインキュベーションの装置をつくったほうがいいですね。

もうひとつは、国内の日本人が大阪を訪れたときに抱く違和感と同化感、おもしろいと思うことと退屈だと言うものを整理すべきです。これは、例えるなら、大阪の寅さんをつくるということだと思います。『男はつらいよ』は、日本各地にエトランゼの寅さんがまるで移民のように訪れるというドラマですよ。どのまちも知らないけれど、そこにあるものや人と出会うことで、ドラマが起ころ。あれが、私は必要だと思います。もう一度日本人の大阪エトランゼ、「大阪よう知らん」という人が大阪に来たときに起こすこと、彼らに大阪に出会ってもらったことをやったほうがいい。どちらも言っていることは同じで、国内外の両方の目が必要だということです。もうひとつ、電子ネットワークも重要です。インターネットと大阪、上方を考えたいほうがいい。

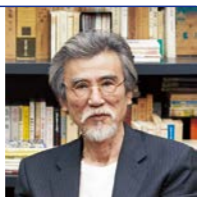


松岡氏が主宰する編集工学研究所の玄関口「井寸房(せいすんぼう)」。訪れる者を知の空間へ誘う。

私としては、海の文化を、日本の歴史のなかでもっとおもしろくしてもよかったのになあと思っています。海の神話や童話が少ないし、住吉の神さまはいますが、海の神さまが少ないことがとても残念です。残念だけれども、ではその分が何になったのかを考えると、やっぱり川筋文化なんですね。川の文化に置き換わっている。

ですので、道と川の文化史、経済史、人物史、産物史、コミュニケーションの歴史といったもの、つまり交の歴史をもう一度やり直さないと駄目だと思えます。その場合、脚光を浴びるのが淀川水系でしょう。石狩川から吉野川まで、信濃川から筑後川まで、日本中のすべての川におもしろいものが残っています。まるで海のようなワールドモデルをつくりあげたのは淀川水系だろうと思います。そういう意味では三十三石船や伏見人形だ

今はみんなそれでアクセスをしてるので、独自の上方インターフェイスをつくる。昔の地図や舟遊びの川堤の図なども、みんなインターフェイスですよ。『こういうふうになっています』というのを電子ネットワーク上で見せられる人が出てこなければ。ですが、グーグルマップの大阪版では駄目ですよ。大阪なりのインターフェイスであり、トランスファージングであること。それを大阪がつくったら、世界中からアクセスしてきます。それは、ずっと気になっていたことです。池永 国内外の目に学び、過去と現在を学び、組み合わせるこそルネッセです。大阪・近畿エトランゼに取り組んでいきたいと思えます。松岡 ぜひ、やってください。



松岡正剛
まつおか・せいこう

編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1944年、京都府生まれ。71年働工作舎設立、総合雑誌『遊』を創刊。87年編集工学研究所を設立。以降、情報文化と日本文化を重ねる研究開発プロジェクトに従事。2000年インターネット上にイシス編集学校を開校し、ブックナビゲーション「千夜千冊」連載を開始。『知の編集工学』『知の編集術』『多読術』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』(全7巻)など著書多数。



池永寛明
いけなが・ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス帰社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。